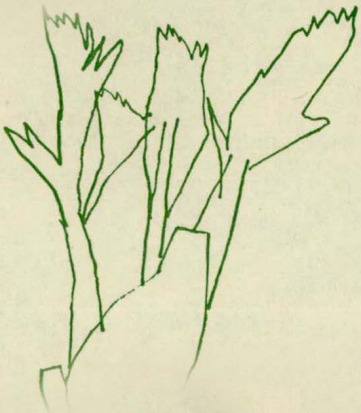
土屋文明その人と歌

大井恵夫 著

土屋文明

その故郷と歌



大井恵夫

著者略歴

1929年、群馬生まれ。法大日文卒
日本近代文学会会員。日本歌人クラブ会員
歌誌「地表」編集同人、現、高崎高校教諭
現住所　前橋市総社町植野676

土屋文明―その故郷と歌―

昭和四十八年十一月廿日初版
昭和四十九年三月十五日重版
定価　一、〇〇〇円

著　者　大井恵夫
発行者　高橋徹
発行所　株式会社　煥乎堂
前橋市本町一―三―四
電話　〇二七二―三三―三三一（代）
振替東京八四八
東京出張所　東京都千代田区神田錦町三の八
電話　〇三―二九一―九六七七

印刷・ヨシダ印刷両国工場・製本

土屋文明・その故郷と歌　目次

I　故郷上郊

土屋文明素描……3
二人の伯父……15
文明の故郷上郊　―井出と保渡田―……23
文明と上郊小学校……29
文明の弟妹……36
末弟望運……44
文明と塚越家……53
塚越家の人々……62

II　文明と高崎

文明の母校高崎中学校……73
高中時代の文明　―蛇床子詠草をめぐって―……83
文明の俳句……94
文明の師村上成之……106
歌人村上成之……115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

左千夫・成之・文明……126

Ⅲ　文明と川戸

川戸への疎開……137
「山下水」の基盤　―川戸の生活―……147
戦後の土屋文明……155
文明と歌誌「ケノクニ」(一)……163
文明と歌誌「ケノクニ」(二)……172
「斑鳩」の歌考……182
文明と新井信示……191

Ⅳ　文明の横顔

「清水越」と水上における講演……201
文明と世良田……209
教師土屋文明……222
跋　文……飯沼喜八郎……230
あとがき……233

I

故郷上郊

土屋文明素描

土屋文明は、近代短歌史上斎藤茂吉と並ぶ『アララギ』派の巨匠である。

九月十八日宵宮に我は生れしといふ産土神を五万図のせず　（青南集）

あわただしき文明開化の落しものあはれなる名を一生持ちたり　（続青南集）

明治二十三年生まれ、開けゆく文明の世にちなんで文明（ぶんめい）と命名されたこの歌人、正確にいえば今秋満八十三歳の誕生日を迎えるが、その三代にわたる歌人の足跡は、華やかに語られる茂吉に比し、何か口ごもりながら語られるという一抹の寂しさを禁じ得ない。故人茂吉、生存者文明、といった両者の差異を考慮しても、歌人文明の研究は遅々たるまま今日に至っている。最近、米田利昭氏のごとき気鋭の研究者を得、文明の真価も徐々に解明されてきた。が、杉浦明平氏の指摘する「土屋文明はもっとも理解されざる作家の第一人者であろう。歌壇ではアララギの主宰者としての文明に気兼ねしているらしいが、文明の作品については評価していない。というより評価で

きない。歌壇以外の世界では、文明の率直な抒情を受けいれるだけの素地が成立していない」歌人の不幸を文明は今なお背負っているのである。

土屋文明を採用せぬは専門なきためまた喧嘩ばやきためとも言ひ居るらし　（六月風）

一読、自嘲とも自負とも取れるこの作品に揺曳される人間文明は、彼の母校高崎中学の後輩大塚雅彦氏がいう「良くも悪くも上州の野武士的な雄勁なヴァイタリティと、博徒であったという祖父の孫にふさわしい強靭なアウトサイダー的生活力と苦渋の重みを受止めて逆説的に切返すようなフモールとを持つ荒御魂（あらみたま）」であって、「理解されざる作家」文明の魅力をこの一首にも見ることができる。牢死したと伝えられる祖父(1)、破産した父(2)、文明の生育史に傷痕をとどめる暗い家系が、彼の感じやすい心をさいなみ始めた少年期（中学に通い始めたころ）、孤独な少年文明は文学との結びつきを持ったといわれながら、その幼少期もまたヴェールに包まれ理解しにくい。

土屋文明の生育史を知る手がかりとなるものに、文明が川戸（群馬県吾妻郡原町）に疎開中（昭和20年6月――同26年11月）群馬アララギ会の歌誌『ケノクニ』（斎藤喜博編集兼発行）へ寄稿した一連の文章がある。これは昭和二十一年六月の『ケノクニ』創刊号から書き出され、二十三年十二月（29回）で終了するが、土屋文明の自伝的性格を持った文章である。近藤芳美、米田利昭両氏の研究にも多く

引用され、歌人文明の幼少期をある程度までつかむことができる。私もこの回想記に頼り、最初土屋文明のアウトラインを描いておこう。

わが歌の売れがたき世に乏しきを分ちて君が持てくるを待つ　（ケノクニ　23年4月）
米を持ち君が来りて言ふなれば恥を忘れて作文をせり　同
結局は君より僕がゆたかならむ文章はかく米はもういらぬ　同

この歌は三月二十日のことと題し五首発表したものの前半三首、齢すでに耳順に近く(五十九歳)なった文明のいう恥とはこの場合何を意味しているのだろう。文明は回想記の最終回を、「斎藤喜博君が月々にくれる米に引かされて、私の愚な思出語りも次第に長びいたが、もう種にする程の種も思ひつかないので」と書き出し、三十年前に父保太郎が売り払った家へ(3)夢で帰ったという話(夢も亦あはれ也)を書いている。

すでに文明は第一歌集『ふゆくさ』の巻末雑記において、祖父の牢死と、このため一家の負わされてきた苦悩を、さらにはこのいまわしき過去を知った少年の日の傷心を「僕は道で村人に逢ふのも恐ろしく、全く土にももぐりたいといふ心持で居ることが多かった」と明かしているが、幾年月を経てもその故郷について語るとき、文明の記憶は父、母、祖父、伯父、を巡る暗い幼少期と絡みあっていく。多感な少年の日々、自分に向ける村人の目を白眼視と意識した上郊(かみさと)も文明にとっては

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

忘れることのできぬ故郷であった。

ふる里の春の林の白楊の花かなしとはみて幾年を経し
ふるさとの吾が家の庭のはは き草かたまり生へて春ふかからむ
弟とならびかへりし父の家もその弟もいまはあらずも

第一歌集『ふゆくさ』に載せるこうした淡い郷愁のにじんだ抒情歌は、歌人文明の初期歌風を代表するもので、「遅き日のつもりて遠き昔かな」と詠じた蕪村の句にも通ずる快いリズムの底に、そこはかとなき哀愁をさえ漂わせている。故郷を回想して歌うときのみ文明は自由にその故郷に帰ることができる。それは次のごとき作品

父の代よりいりくめる金のいきさつに帰る日なけむあはれ故さと　（山谷集）

によっても想像できよう。文明の幼時を回想した作品につきまとう孤独な影は、反骨の精神を云々される作家の時折り漏らす嘆息にも似ている。

幼きより朗けき世を知らず来て子供に向ふ時にけはしく　（山谷集）

妻も子もなき生を経むと思ひけり友とあそばぬ少年なりき　（山谷集）
夏の葉を吹きたつるあらき北風にうちひしがれし少年の日ありき　（六月風）
むれくさき塩引の香のただよひてわが生ひ立ちの日を思はしむ　（往還集）
紫の花の馬鈴薯のまづかりし幼き記憶おもひいでつも　（山谷集）

文明が「帰る日なけむ」と歌うその故郷への負い目は、処女歌集『ふゆくさ』の時代にも増して強く作品に滲み、彼の孤独な少年の日々を語っている。

「むれくさき塩引の香」に、また、「紫の花の馬鈴薯」によみがえる故郷は、文学的に美化された故郷とうってかわり、文明自身の貧しい農村での幼時の「私は鮭鱒の塩引、それから鰯と秋刀魚以外の魚は見たこともなかった。或る時大工の老人が鰯の目の赤いのは古いのだ。越後ではそんなものは食はないといったので驚いた」(4)私の最も嬉しかったのは食べる麦飯中の米の量が、私の家よりははるかに多いことであった。その上私たち子供には時々米飯が食はされた」(5)生活を通じてリアルに描かれている。塩引の歌は伊香保、馬鈴薯の歌は北海道の移民村、といずれも文明生地において作られたものではないが、文明の「遠きにありて思う故郷」とは、それが単なる郷愁に終始することなく、自分が故郷において経験した乏しい生活と軌を一にする生活者への呼びかけとなって広がっていく点注目される。

このことは近藤芳美氏のいう「日本の農村と農民の、地を這うような労働と、その人生に対する

悲しみと怒りと共感」であり、これが文明をして傍観者の位置に立つことを許さないのである。

山沢に田植ゑて人は住みぬるか乏しき竹の色づきて見ゆ　（山谷集）

一椀にも足らぬばかりの田を竝べ継ぎて来にける国を思ふも　（少安集）

恵まれざる生活者の心に深く立ち入り、こう繰り返し歌うところに、貧しい農村を故郷に持った文明の生活信条を見ることができる。文明がプロレタリア文学の渦中に巻きこまれず揺れ動く世にあって自己を守り得たのも、安易な夢より現実を取る農民的思考がより強く働いたからといえる。

気力なきわが利己心はいつよりかささやかにしのび身を守り来し　（山谷集）

人よりも忍ぶをただに頼みとすわが生ぞさびし子と歩みつつ　同

農の家に育ちし少年の二十年わが一生の考方を支配せり　（山の間の霧）

父の破産と入り組める家系から、現実の郷土を失った文明は、遺産としての農民気質を受け継ぎ、都会生活に食い入っていくよりほかなかった。そして、文明の継承した農民の心は、彼の一生の考え方を支配するほどの根強さで、文明の内部世界を堅牢に形成している。

こうした文明の内部世界を、その父保太郎とその子文明の関係においてとらえ考察すると、歌人

土屋文明の人間像はかなり鮮明に浮かんでくる。

文明が父保太郎について語った文章には、「見ぬ兄」「石灰の話」（ケノクニ・23年4月。同誌23年9月）がある。一般に書かれる両親への追憶文は、両親にまつわる思い出話に終始して、叱られたことから往時の両親の厳格さとか、愛情の深さとかを偲ぶといった類のもので、そのうえ教訓めいたことばまで付加されているのが多い。主題も文体も既成の枠を出ない追憶文の殻を破り、非情とさえ思える冷静な筆致で文明は生前の父を描き、父の持つ醜さをも剔出してみせる。

「父は子供に対して愛情があるのかないのか分らないやうな人間だった。彼はただ貧困の中に自らの物欲をあふりあふり生を終へたといふべき人間であった」「見ぬ兄」の最初と最後の部分を引用したが、生糸や繭の仲買いをしたりして、農作にはまったく興味を示せなかった父、小賢しく商売じょうずだったというこの父も、最後は一攫千金を夢みて始めた石灰製造の事業に失敗し、土地も家屋も売り払ってしまう。金力が人間評価の尺度にもなる農村にあって、土地家屋を手放すことは完全な敗北を意味する。放蕩三昧による破産者がその豪遊さゆえに、いつまでも村人から懐かしがられるのに比べ、貧乏から逃れようと齷齪し、少しでも割のよい仕事を追い回し、私財のすべてを注ぎ込んでしまった文明の父などは、痛ましい農民の犠牲者の一人といってよかろう。

親しからぬ父と子にして過ぎて来ぬ白き胸毛を今日は手ふれぬ　（往還集）

遠々と来て診たまへる君がまへにくどくどと病を言ふ父を聞く　同

病む父がさしのべし手はよごれたり鍍金指輪ぞ吾が目にはつく　（往還集）
家うちに物なげうちていら立ちつ父を思ひ遺伝といふことを思ふ　同
いきどほり妻よぶ声の父親に似て来しことを吾知りて居り　同
死近くなりてふる里を恋ひにける父をやせめて親しといはむ　同
亡き父と稀にあそびし秋の田の刈田の道も恋しきものを　（山谷集）
己が生をなげきて言ひし涙には亡き父のただひたすらかなし　同
人悪くなりつつ終へし父が生のあはれは一人われの嘆かむ　同
吾が父の老眼鏡をかけたるは今の吾より若かりしと思ふ　同

「空論や空論家を軽蔑して、殊に学校教師は尊敬しなかった」（「石灰の話」）と回顧する父親は、学校教師の月給の安いことをその理由としていた。だが、皮肉にも文明は父親の尊敬しなかった教師を職業に選び、父親との距離をますます隔てていった。文明が『ケノクニ』に寄せた回想記に登場する父親は、「私は私の父の家では何一つ文学書といふものを見たことがない。或る時父が漢文の大部の書物を買ひこんで来た。私が不思議に思ふ暇もなく、父はそれを祖母に渡して敷物の渋紙に張ってしまった。」（「阿新丸」22年6月）およそ文学とは縁の遠い男で、「大晦日までに地主に運ぶべき小作上納米を別の債権者に差し押さへられ、親父は年末を恐れて行方不明になってゐた」（「わが故里上野」27年8月）いつも何かに追われる男でもあった。

文明の記憶する父親の姿には、「親しからぬ父と子」の過ぎ去りの日日が刻まれている。小心翼々と生きて来た父が、医師の前に今くどくどと病状を言い、その父のよごれた手に鍍金の指輪が光る。文明は常にある距離をおいて父を見つづけてきた。そうした父を「家うちに物なげうちていら立つ」とき、また「いきどほり妻呼ぶ声」に自分との血のつながりにおいて確認するのである。投げ出すような表現の中に索莫とした心境を歌っている。「人悪くなりつつ終へし父」の生涯を思い返し、父子が背負い続けた人生の重荷を嚙みしめながら文明は父を歌う。「亡き父と稀にあそびし秋の田の刈田の道」を恋うる心は、幼時を伯母(6)に育てられ、「私は別段父に愛情を求めることを必要としなかった」(「見ぬ兄」)文明だけにその故郷と父を偲ぶ心の切なるものがある。

おとろへて歩まぬ吾児を抱きあげ今ひらくらむ蓮の花見す　　(ふゆくさ)

幼かりし吾によく似て泣き虫の吾が児の泣くは見るにいまいまし　　(山谷集)

ここには「蓮の花見す」という素朴な行為をとおして見られる愛すべき父親文明と、幼時の自分を子に見出し撫然たる父親文明との二つの顔がある。文学とは無縁だった父から自分の受けついだ「短気なもの投げうちて怒る」性格を自覚する文明が、吾が子を「いまいましく」と歌うところに血縁が二重の意味をもって作者に還ってゆく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com